



まぼろしの沙羅双樹を  
探し求めて

長嶺胃腸科内科外科医院  
長嶺 信夫

1. 沙羅双樹が目の前に！

祇園精舎があるシュラーヴァステーを出発してから6時間、クシナガラが近づいてきた。レンガ積みの粗末な家や田畑がならぶ田舎道を進んでいくと、やがて道の両側に林が見えてきた。スラッとした真っすぐ空に伸びる綺麗な樹々である。見とれていると添乗員の声が飛んできた。道路わきに生えている林が沙羅双樹の樹というのだ。急いでカメラをかまえる。\* \*ブッダ（釈迦）や弟子たちは遊行の際しばしばサーラ（Sala）林の中で休んでいる。ああ、これが仏典によく出てくる沙羅の林なのか\* \*。窓の外にカメラをかまえたもののバスを停めてくれる気配はない。スピードをあげて走るバスの中から500分の1秒のハイスピードでシャッターをきった。何枚も、何枚も（写真1）。

沙羅双樹の林が目の前にある！沙羅の樹を探し求めて既に2年が過ぎている。今度こそ沙羅

双樹を自分の目で確認し、その苗木を持ち帰らなければならない。よし！クシナガラに着いたら自分で車を手配し取りに戻ろう。

2. 念願の沙羅双樹を手

クシナガラ郊外にある釈迦入滅の地に涅槃堂がある。広大な寺院の境内に入ると真正面に沙羅の樹と涅槃堂が、右手に無憂樹が見えてきた（写真2）。数日前からツアー仲間にそのいわれを説明してきた樹である。自然にその樹に足が向く。沙羅双樹の葉は互生し、楕円形で先端はとがり、基部は心臓形をしていて後に記す旺文社の百科事典の記述の通りであった（写真3）。樹の前で記念撮影をすませ涅槃堂に向かう。涅槃堂の前で思いがけない高僧の出迎えがあり、読経の中厳かに沙羅双樹の贈呈式が行われた。

2004年5月に糸満市米須に菩提樹を植樹してからスメダ尊師に入手を依頼していた待望の沙羅の樹である。ムラガンダ・クティ寺院があるサルナート（鹿野苑）やデリーには自生していない樹なので入手が困難であったのだが、私達のクシナガラ訪問を知ったスメダ尊師が涅槃堂の高僧に連絡し手配してくれたのであった。スメダ尊師の笑顔が脳裏に浮かぶ。

それにしても、間に合わせに準備したのであるか、枝先に1枚だけ葉がついているいかに



写真1：クシナガラ郊外で見た沙羅の林。



写真2：クシナガラの釈迦入滅の地に建つ涅槃堂と沙羅の樹。



写真3：沙羅双樹の葉は楕円形、先は尖り、基部は心臓形である。



写真5：沙羅双樹贈呈の証明書を手（2006年10月23日）。



写真4：涅槃堂の高僧から贈られた沙羅双樹と背景は大涅槃像。



写真6：600ルピーで購入した沙羅双樹の苗木。

も貧相な2本の沙羅の苗木が真新しい素焼きの鉢に入れられていた（写真4）。しかし厚意は甘んじて受けなければならない。ましてや、高僧からじかの贈呈である。高僧から贈呈されたことの証明をありあわせのホテルのメモ用紙に記載してもらった（写真5）。寺院からの帰路、別に手配しておいた沙羅の苗木4本を600ルピー（日本円に換算すると1,800円、貨幣価値からすると約2万円）で購入し持ち帰った。いかにも高い買い物であったのだが、このチャンスを逃がしたら何時入手できるのかわからないのである。買い求めた苗木は寺院から贈呈された苗木よりも葉を多数つけ、ビニール製の鉢になじみ、生き生きとしていた（写真6）。これだけの本数の苗木があれば、どれかは根付くはずである。これで念願の沙羅双樹の苗木が入手できたのだ！

### 3. 沙羅双樹とはどんな樹？

2004年5月に菩提樹を植樹した後、菩提樹苑に沙羅双樹と無憂樹を植えたいという新たな夢をいだくようになってきた。

ブッダ（釈迦）は布教の旅を続け80歳の高齢になり、身体の衰えを自覚し弟子のアーナンダを連れて最後の旅にでた。故郷のカピラヴァストゥをめぐらしたともいわれている。途中病をえて、クシナガラ郊外の沙羅林にたどりつき、2本の沙羅の樹（沙羅双樹）の間に横たわり涅槃に入ったといわれている。

また無憂樹の名のいわれは、ブッダの母・マヤー（摩耶）妃が懐妊し、お産のために里帰りの途中、ルンビニー園で美しい花が咲いているこの樹の枝に触れようとした時、急に産気づいてブッダを出産し、お産が軽かったため、その樹を無憂樹と名付けたといわれている。沙羅双樹と無憂樹が植樹できたら、沖縄の地にはじ



写真7：旺文社の学芸百科事典に載っている沙羅の樹の図譜。



写真8：タイで沙羅双樹と言われている砲丸木の花。

めて仏教3大聖樹がそろふことになるのである。

ところで、無憂樹は2003年7月に菩提樹贈呈の際の旅行で、ラージギルにある竹林精舎で見かけたのだが、沙羅双樹は見たことがない。それで沙羅双樹のことを調べることにしたが、不思議なことに県立や那覇市立図書館にある植物事典を手当たりしだい調べても記載がみあたらないのである。いくつかの国語辞典には釈迦入滅にからんでわずかに記載があるものの植物学的な記載はない。ようやく旺文社発行の学芸百科事典に記載を見つかることができた。

それによると『サラノキ（沙羅樹）*Shorea robusta* GAERTN インド原産の純林をつくる常緑高木。「シャラノキ」「サラソウジュ（沙羅双樹）」ともいう。双子葉類・フタバガキ科 高さ30メートル 直径60cmになる。葉は革質で互生し、卵状長楕円形、長さ20cm 巾10cm 前後である。先はとがり、基部は心臓形で、側脈は平行する。花は3月に開き、淡黄色で芳香があり、直径3cm、円すい花序に集まり、雄しべは約50本、雌しべは1本ある。がく片5個は花後に成長し、翼状で、長さ約6cm、ほぼ球形の果実（さく果）をおおっている。\*仏教の聖木として有名である。日本ではナツツバキをシャラノキと呼んで植えられているが、これは本種とまったく違った種類である。〈奥山春季〉と記載され、図譜が載っていた（写真7）。

概念はつかめた。それで早速菩提樹を贈呈してもらったスメダ尊師に樹の入手を依頼したのだが、寺院のあるサールナート近郊やデリーには自生せず、ブッダ（釈迦）涅槃の地・クシナ

ガラ地方でしか入手できないとのことであった。

#### 4. タイの沙羅双樹

その後色々手を尽くしたものの樹を入手できないまま2年近くが過ぎてしまった。

2006年4月下旬、沖縄ツーリストが受賞した太平洋・アジア観光協会金賞授賞式典に同行しタイを訪問する機会を得た。

タイ訪問は2度目であったため、生来果物好きの筆者は観光地めぐりをそっちのけにして、果物市場に直行した。マンゴスチン、ドリアンなど待望の果物が並んでいて、その中にハリネズミのような外観をした見たことがない小ぶりのヤシの実があった。同行の現地添乗員にその名を聞くと「サラ（サラカヤシ）」という。「サラ」と聞くと反射的に沙羅双樹のことが頭に浮かぶ日常だっただけに、「サラと言うと沙羅双樹のサラと同じ名前ですね、ところでタイに沙羅双樹の樹はありますか？」と尋ねると「あります！大理石寺院とワット・ポー（涅槃寺）にあります。涅槃寺は遠回りなので大理石寺院にまいりましょう」と言う。タイに沙羅双樹の樹がある！ようやく沙羅双樹に直面できる！そう思うと胸がドキドキしてきた。大理石寺院は「王様と私」の映画で有名なラーマ5世（在位1886～1910年）が寺院を改修し外観を総大理石にした寺である。寺院内に展示されている仏像を拝観した後、寺院の裏にまわった。菩提樹などの樹が植えられていてその中の一つの樹に



写真9：大理石寺院の砲丸木の実。

案内された。「この樹が沙羅双樹です」と言う樹を見ると、トボロチの花に似たあざやかな紅紫色の花が連珠状に咲いていて、聖木であることを示すリボンが結ばれていた（写真8）。しかし、どうみてもおかしい。半信半疑のまま写真を撮り、樹を観察していると大きな砲丸のような実がついている（写真9）。なんのことはない。英語でCanon ball treeとよばれている砲丸木ではないか。近くにもう一本砲丸木が植えられていた。

それにしても旺文社の百科事典に記載されている沙羅双樹とはあまりにも違う（沙羅双樹はフタバガキ科で砲丸木はサガリバナ科）。釈迦が入滅した際、花の色が黄色から白に変わったというのにこの花の色はいったいどうなっているのだ！

現地添乗員の説明はこうである。この樹はラーマ5世が1883年頃インドを訪問した時持ち帰って植えさせ、別名涅槃寺と呼ばれているワット・ポーに植えられている樹もそれ以前にインドから持ち帰って植えさせたとのことであった。

### 5. スリランカの沙羅双樹

頭が混乱してきた。どうみてもおかしい。ラ



写真10：沙羅双樹の花として放映された砲丸木の花。

ーマ5世はにせものの樹を持ち帰ったのではないか？頭の整理がつかないまま2ヶ月が過ぎた。2006年7月1日のテレビ番組：「世界・ふしぎ発見 スリランカ 知られざる仏教大国の素顔」でまたスリランカのことを放送されるという。菩提樹の件でスリランカを訪問したことがあるので喜んで見ていると、驚いたことにその中で沙羅双樹の花としてまたもやCanon ball tree（砲丸木）の花が画面に映し出され（写真10）、今度はルワンウェリ・サーヤ大塔の「ダーガバと呼ばれる仏塔の形はその花のめしべを模したものであるといわれている」と放送しているのではないか。いったいどうなっているのだ！こうなっては何が何でも釈迦涅槃の地・クシナガラを訪問し、沙羅双樹の樹を直接見て、クシナガラで本当に砲丸木が自生しているのか確認しなければならない。

### 6. 砲丸木は沙羅双樹ではなかった！

祇園精舎とクシナガラ訪問を2006年10月にひかえた8月、無憂樹の件で沖縄海洋博覧会記念公園管理財団本部長の植物学者・花城良廣氏に面談する機会があった。懇談中沙羅双樹の件を尋ねたのだが、「沙羅双樹の樹は見たことはないが、砲丸木は原産地が南米のギアナなので考えられない」「色々言われているようですが、是非解明してください」と言われたのである。その言葉に勇気づけられクシナガラを訪れた際に、「クシナガラで砲丸木が自生していま



写真11：沙羅双樹と無憂樹の植物検疫証明書。



写真12：筆者宅で根付いた沙羅双樹の苗木（2007年1月14日撮影）。

すか？」と砲丸木の写真を見せながら、ホテルの従業員に尋ねてみたのだが、自生しているどころか、見たこともないとの返事であった。現地添乗員バサキ氏によると、デリーやコルカタ（カルカッタ）でも砲丸木は見かけないとのことであった。

すでに紹介したように、クシナガラで直接自分の目で見て、確認した樹は明らかに砲丸木とは異なる樹であった。タイやスリランカには釈迦涅槃の地・クシナガラに自生していない砲丸木が沙羅双樹として間違っって移入されたのである。

## 7. 沖縄ではじめて！

そういう訳で、今回沙羅双樹の苗木を入手したのであるが、沖縄には勿論初移入であり、本土でも植物園などの特別な施設内か、沙羅双樹に魅せられた極めて少数の方々が自宅の温室で育てているだけである。本土では露地では育たないといわれている。

京都の妙心寺東林院では毎年梅雨の頃（6月中旬～下旬）に「沙羅の花を愛でる会」と称して、ナツツバキの花を観賞する会があり、今年も6月12日から30日の間観ることができることである。勿論本物の沙羅双樹ではないが、短い間に散ってしまう花ははかない、無常の世界を象徴する花として毎年のようにテレビで紹介されている。

それほど貴重な樹を入手したのだから、無事

に沖縄に持ち帰らなければならない。そのためには苗木を飛行機やバスを乗り継ぎながら旅行日程にしたがい持ち運び、最終日にホテルで根のまわりの土を洗い落とす必要がある。

そういうわけで移動の都度沙羅の苗木を大事に胸に抱えていたのだが、ちょっと眼を離したすきに心ない人の手荒な扱いで2本の苗木の幹が折れ、残りの樹の枝葉も損傷を受けてしまった。幸いにも根の損傷がまぬかれたので、折れた枝先を取り除き、後の処理をすませ、沖縄に持ち帰ることができた。

那覇空港の植物検疫官は沙羅双樹を見たことがない上、どのような樹なのかも知らない。当方の説明にうろたえながら（？）あれこれ書類を調べている。隣で説明を聞いていた女性の検疫官が「育つといいですね」とにこやかに言ってくれた。やがて検疫官が丸いスタンプをおした検疫証明用の小さな紙を渡してくれ、その紙に私が「沙羅双樹」と書き込んだのである（写真11）。

沖縄の地を踏んだ「沙羅双樹」はわが家の庭で新芽から若葉が出てきて根付いている（写真12）。何時になったら大きくなるかわからないものの、大きく育ったら沖縄菩提樹苑に無憂樹とともに植える予定である。それまでは毎年慰霊の日に菩提樹苑で公開することにしよう。

（2007年1月記）